英語教員採用試験の有効性・妥当性に関する実証的研究
—日韓中高英語教員に対する意識調査に基づいて—

Validating the Employment Examinations for Japanese and Korean Secondary School Teachers of English

WAKITA Hirofumi
脇田博文

概　要

優秀な英語教員を確保するためには、養成・採用・研修各段階の総合的かつ一貫性のある充実を図ることが喫緊の課題となる。とりわけ、日本や韓国においては、教員採用試験は教壇に立つ者を選定する重要な手段であり、それゆえに試験の有効性や妥当性の検証は不可欠である。さらに、教員志望者の試験準備や教員養成プログラムの内容にも一定の波及効果を及ぼす意味からも、それは重要な意味を持つ。

この問題意識に立って、これまで良質な英語教員採用（英語専門筆記）試験の研究開発とその波及効果の検証を目的として一連の研究を行ってきた。その一環として、現行の教員採用試験各段階の現状と問題点、つまり優秀な教員を担保する採用試験として各試験がどの程度機能しているかを明らかにするとともに、過去の研究成果を踏まえて、英語教員に求められる能力を有効に測定する英語専門筆記試験問題モデルを開発することを目的として、日韓の中学校・高校英語教員を対象とした意識調査を実施した。

本稿では、この意識調査における前者の課題、すなわち英語教員採用試験各段階の現状と問題点に関する調査結果の分析と考察を行い、併せて日本の英語教員採用試験の改善に向けて提言を行う。

キーワード：日韓中学校・高校英語教員、教員採用試験、1次英語専門筆記試験、
2次実技試験、標準テスト（TOEFL・TOEIC 等）、有効性・妥当性

Abstract

This study is part of a large-scale research project to improve Japanese teacher employment examinations, focusing on the first-stage written English tests. The critical issues in these examinations involve what knowledge and skills should be evaluated, and in what way, in order to identify quality teachers.

To this end, a questionnaire was administered to current Japanese and Korean secondary school English teachers, in which they were asked to evaluate the Japanese and Korean teacher employment examinations. The questionnaire is comprised of two sections. Section A deals with teacher perception as to the first- and second-stage employment examinations, which include a

written English test, an English interview, the creation of a teaching plan, and the presentation of a mock lesson. Section B involves the evaluation of five types of typical questions extracted from the Korean and Japanese written English exams.

This paper focuses on section A and investigates the Japanese and Korean teachers' perception of the first- and second-stage to validate the examinations themselves. The findings are discussed and ways to improve the Japanese teacher employment examinations are suggested.

Keywords: "quality" secondary school English teachers, knowledge and skills required, Japanese and Korean teacher employment examinations, validity

1 問題意識

近年、グローバル化の急速な進展に伴い、国家的な戦略構想の一環として英語コミュニケーション能力の育成が強く要請される中で、英語教員にはますます高い英語力や専門的指導力が求められる方向にある。その一例として、日本人に求められる英語力に関する提言を受けて、「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想（2002年7月）及び行動計画（2003年3月）が打ち出され、中学校・高校の英語授業の改善、指導力及び指導体制の充実などとともに、英語教員が備えておくべき英語力の目標数値が明示され、5か年英語教員悉皆集中研修が実施されたことは周知のことである[1)]。しかし、そもそも英語教員に求められる英語力あるいは専門的能力とは何かということについて踏み込んだ議論もなく、一定の共通認識もほとんどない。この実状は、大学英語教員養成プログラムや各都道府県市教員採用試験にも反映されていると言ってよい（脇田 2006; 脇田・松村 2007）。

一方、今後の教員養成・採用を取り巻く社会的、政治的な背景に目を向けると、団塊世代の大量退職や正課としての小学校英語教育導入により英語教員の需要が増加すること、さらには大学全入時代の中での大学生の学力自体が低下することが要因となって、英語教員全体の質的低下は免れえない。

このような文脈の中で、優秀な英語教員を確保するためには、養成・採用・研修各段階の総合的かつ一貫性のある充実を図ることは喫緊の課題となる。とりわけ、日本や韓国においては、教員採用試験は教壇に立つ者を選定する重要な手段であり、それゆえに試験の有効性や妥当性の検証は不可欠であると考える。さらに、教員志望者の試験準備や教員養成プログラムの内容にも一定の波及効果を及ぼす意味からも、それは重要な意味を持つ。

この点については、教育職員養成審議会も、第3次答申（1999年12月）において、教員採用試験では多様な力量を持った人材の確保のために選考方法の多様化、選考尺度の多元化を図ると同時に、教員採用に関わる学力試験そのものについても、教員の一定の水準を担保する観点から良質な学力試験問題の研究開発を行うことを強く求めている。

以上の問題意識に立って、後述のように、これまで良質な英語教員採用（英語専門筆記）試験［以下、英語専門筆記試験］の研究開発とその波及効果の検証を目的として一連の研究を行ってきた。その一環として、①現行の英語教員採用試験各段階の現状と問題点、つまり優秀な教員を担保する採用試験として各試験がどの程度機能しているかを明らかにするとともに、過去の研究成果を踏まえて、②英語教員に求められる能力を有効に測定する英語専門筆記試験問題モデルを開発することを目的として、日韓の中学校・高校英語教員を対象に意識調査を実施した。

本稿では、この意識調査における前者の課題、すなわち教員採用試験各段階の現状と問題点に関する調査結果の分析と考察を行い、併せて日本の英語教員採用試験の改善に向けて提言を行う。

2 先行研究

教員養成、採用、研修に関わる研究は日本ではまだ緒についたばかりである。この分野の研究は大学英語教育学会（JACET）でも、中学校・高校英語教員の指導力向上を図る意味から、教員採用試験や大学養成プログラムのあり方について関心が出始めている（大井・笹島 2004；伊藤・神保 2004；笹島・大井・古家・清水 2005）。これらはいずれも教員養成・採用制度を包括的に検討するにとどまる。しかし、JACET 教育問題研究会（2006）は、「英語科教職課程における英語教授力養成に関する実証的研究」の中で、まず英語力（英語口頭運用能力と英語読解・文法力の養成）、そして「教科に関する科目」では授業力の養成を優先事項として、英語の技能別指導技術を養成する科目を設置すること、そして教材論、評価論、マルチ・メディア教授法などの科目は実践的内容とするという提言を行い、大学英語教員養成プログラムの再考を促していること、そして何よりも各都道府県市教育委員会担当指導主事、すなわち採用者側から「採用したい英語教師像」を明らかにしたことは、注目される。

教員採用試験の研究については、high-stakes test として社会的にも重要な意味を持つにもかかわらず、非常に限られている。これは、ごく最近になるまで試験内容や評価基準が公開されなかったことが主たる要因であるだろう。まず、清水（2005）は採用試験の基準設定や評価のあり方が明確でなく、共通理解がないことを指摘し、英語教員に求められる資質・能力を適切かつ有効に測る方法の研究開発、特に良質な学力試験の研究開発のために大学や教育委員会などが連携・協力する重要性を主張している。次に、及川（2007）は、埼玉県・さいたま市の過去 3 年間分の問題を分析し、英語力、特に英文を読む力、英語教育の関する軽い文献を読む力、学習指導要領の理解、教材・テスト問題の作成能力などが問われていることを実証している。また、秋山（2009）は、2007 年度実施の全国都道府県市教員採用試験に出題された英語問題 2,096 問を分析し、①英語能力関連問題が 90% と大勢を占め、英語教育関連問題はわずか 9% であること、②英語能力関連問題は総合問題が 27% と最も多く、次にリスニング 22%、リーディング 18% と続くこと、③各都道府県市で多種多様な能力が求められていることを明らかにし、英語教員に求められる能力を明確にして、信頼性・妥当性のある試験を作る必要性を指摘している。同様に、渡辺（2008）は、現場での授業分析を通して、英語教員に必要な能力の細目規定を作成し、それに基づいてどのようなテストを教員採用試験で作成すべきか、具体的な提案を行っている。

このように限られた研究状況の中で、上記の脇田・松村による一連の研究は、日韓の比較に立って、教員採用試験制度や英語専門筆記試験に踏み込んで良質な英語教員採用試験の研究開発を行い、また大学教員養成プログラムへの波及効果を追求しようとする点で注目される。まず、脇田・松村（Matsumura & Wakita 2006；脇田・松村 2007；Matsumura & Wakita 2007）は、日本の中学校・高校英語教員を対象に日本と韓国の英語専門筆記試験に関する意識調査を行い、教員採用試験としての有効性・妥当性について検討する。その過程で、そもそも英語専門筆記試験で測るべき能力とは何か、敷衍すれば、優秀な英語教員に求められる能力とは何かという問題に帰着し、この本質的な問題を解決するために、韓国教員採用選考試験制度を振り返り、過去 5 年間の 1 次英語専門筆記試験問題の分析と考察を通して、韓国の中等学校英語教員に求められる知識・能力について明らかにする（脇田 2008）。さらに、2009 年度に抜本的な改編を見た韓国中等学校教員採用試験制度、及び政府関連専門委員会が提出した採用試験作成・実施のガイドラインとなる英語教員資格基準と評価内容・方法・基準について分析を行い、英語教員に求められる能力そのものに関する問題に考察を加える（脇田 2009）。以上が、先行研究の概要である。

3　教員採用試験における標準テスト（TOEIC・TOEFLなど）の活用

本調査の内容に関わって、日韓の教員採用試験における標準テストの活用状況について触れておく必要がある。なお、韓国の教員採用試験制度に関する詳細については、脇田（2009）を参照されたい。

標準テストの活用については、教育職員養成審議会第3次答申（1999年）において、「筆記試験結果に加え，TOEFLやTOEIC，実用英語技能検定等のスコア等を考慮するなど，外国語教員の採用選考に際しては，実践的なコミュニケーション能力の評価を適切に行うことを検討することが必要である。」ことが示された。さらに、2003年には、上述の「英語が使える日本人の育成」に係る行動計画において、英語教員が備えておくべき英語力として、TOEIC730点、TOEFL550点、英検準1級という目標数値が設定された。これらのガイドラインにそって、多くの各都道府県市教育委員会は、教員採用試験において標準テストによる英語特化基準を設け、1次教科（英語）試験などを免除するようになった。しかし、方向性としては理解できても、このような英語特化基準の扱いに関する妥当性について今までに議論されたことはないし、また、この特化基準が優秀な英語教員を担保するのにどの程度有効に機能するかについても明確でない。

表1は平成21年度全国教員採用試験における英語特化基準の一覧である。全国59の教員採用試験のうち37試験（62.7%）において特化基準が設けられている。その基準は、英検で概ね1級、TOEFL平均は579点、TOEIC平均は829点である。また、TOEFL 550～610点、TOEIC 730～900点と幅があり、基準点は一定していない。図1は英語特化基準の点数分布である。TOEICを例に取ると、900点が5都県市（14%）、850～899点が14府県市（38%）、800～849点が6県市（17%）、750～799点が3県市（8%）、730点～749点が6県（17%）、その他2県（6%）という内訳になっている。たいていの場合、行動計画に示された目標数値よりもかなり高いことがわかる。次に、免除内容に関して言えば、1次教科試験を免除とする場合が大多数であるが、1次実技試験（英会話）を免除する場合（11県市）、参考として扱う場合（3県市）、そして1次試験で併せて実施される教養試験、面接、小論文等を全て免除する場合と、免除内容にも一貫性がない。また、英語特化基準を採用しない府県市も22あるが、その意図は明確ではない。

これに対して、韓国の採用試験においては、標準テストは、英語特化基準としてではなく、大学での成績と同様、加算点として扱われてきた。2007年度までの1次筆記試験（全国型、ソウル・仁川型2タイプの統一テスト）の試験内容及び配点は、教育学（教職関連科目）20点、専門科目80点、大学在学成績20点、そして標準テスト成績加算点10点、合計130点であった。2008年度以降は、教員養成制度の総合的改革が進展する中、1次筆記試験偏重を是正するために、採用試験は3段階選抜に変更され、1次総得点は半分に減らされた。その結果、1次試験は筆記試験50点（教育学10点；専門科目40点）、大学在学成績10～20点、標準テスト成績加算点5点という構成になった。要するに、韓国の教員採用試験では、標準テストの成績はボーナス点として扱われるが、配点が低く、合否にはさほど影響力を持たないと考えられる。とはいえ、一般論として、日本同様に、韓国ではTOEICやTOEFLなどの標準テストへの関心は高く、英語力の資格証明として重要な意味を持っているので、様々な波及効果が想定される。

本稿は、以上のような標準テストに係る実態や問題点に着目し、今後の教員採用試験制度や英語筆記専門試験のあり方を考えるために、日本の中

図1　英語特化基準（TOEIC）の点数分布

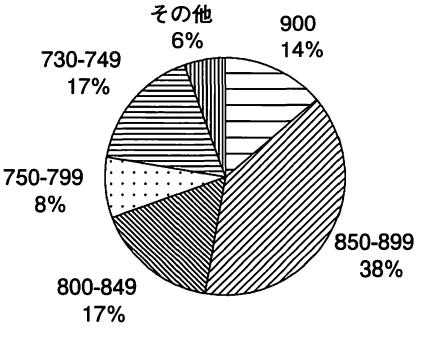


表1　全国教員採用試験における英語特化基準（平成21年度）

No.	都道府県	英　検	国連英検	TOEFL	(CBT)	TOEIC	免除内容
1	北海道・札幌市	1級・準1級	特A級・A級	550	213	730	1次教科試験
2	青森県						
3	岩手県						
4	宮城県・仙台市	1級		590	243	880	1次教科試験
5	秋田県	1級・準1級		580	237	860	1次実技試験(英語)
6	山形県						
7	福島県	1級		590	243	880	1次教科試験
8	茨城県						
9	栃木県	1級		600	250	900	1次教科試験
10	群馬県	1級		600	250	900	1次試験(教科試験、小論文、実技試験(PC)、面接)
11	埼玉県	1級		600	250	895	1次試験(教科試験、教養試験、面接、小論文)
12	さいたま市						
13	千葉県・千葉市	1級		590	240	860	1次教科試験・教養試験
14	東京都	1級		600	250	900	2次実技試験(英語)
15	神奈川県	1級		550	213	780	1次教科試験
16	川崎市	1級		550	213	780	1次教科試験
17	横浜市						
18	新潟県						
19	新潟市						
20	富山県						
21	石川県	1級		600		900	1次教科試験・実技試験(英語)
22	福井県	1級		600	250	860	1次教科試験・教養試験
23	山梨県						
24	長野県						
25	静岡県						
26	静岡市						
27	浜松市						
28	愛知県						
29	名古屋市	1級		600	240	900	1次教科試験、2次実技試験(英語)
30	岐阜県	1級		600	250	860	1次教科試験・教養試験
31	三重県	準1級		550	213	730	1次教科試験
32	滋賀県	1級		550	213	780	1次教科試験
33	京都府	1級		580	237	860	1次教科試験
34	京都市	準1級		580	237	860	1次教科試験
35	大阪府・堺市						
36	大阪市						
37	神戸市			優秀		優秀	選考の参考
38	兵庫県			550	213	730	選考の参考
39	奈良県						
40	和歌山県	1級		570	220	800	1次教科試験
41	鳥取県						
42	島根県						
43	岡山県	1級		600	250		1次教科試験
44	広島県・広島市						
45	山口県	1級		590	243	860	1次教科試験(筆記)
46	徳島県	1級		580	237	816	1次教科試験・実技試験(英話)
47	香川県	1級		580	237	850	1次教科試験
48	愛媛県			600	250	860	1次実技試験(英語)
49	高知県	1級		580	237	800	1次教科試験
50	福岡県	1級		580	237	816	1次教科試験・実技試験(リスニング)
51	福岡市	1級		610	253	816	1次教科試験(リスニングを除く)
52	北九州市	1級		580	237	816	1次教科試験・実技試験(リスニング)
53	佐賀県						
54	長崎県	1級		550	213	850	1次教科試験
55	熊本県	1級		550	213	730	1次教科試験
56	大分県	1級		550	213	730	1次実技試験(group discussion)
57	宮崎県	1級		595	243	860	1次教科試験(リスニング含)
58	鹿児島県	1級・準1級		550	213	730	1次実技試験(英語)
59	沖縄県			優秀		優秀	選考の参考
	平均			579	234	829	

各都道府県市教育委員会の公表データに基づき脇田作成。

学校・高校英語教員が標準テストの特化基準についてどのような意識を抱いているのか、またどのように活用すべきと考えているか、検証することにした。

なお、文部科学省（1999）も、「英語教員が備えておくべき英語力及び教授力の内容について分析するとともに，英語教員を対象とした調査を実施し，英検，TOEFL，TOEIC などの特性を踏まえ，英語教員が備えておくべき英語力と外部検定試験との関連，各試験の点数互換の妥当性などを研究する。」と、これらの標準テストが英語教員の英語力を測定するテストとして、どれほど有効性・妥当性を備えているのか検証を行う必要性を示している。

4　調査計画・調査内容

(1) 調査計画

ア　調査時期　2007 年 8 月～ 2008 年 3 月

イ　調査対象　日韓中学校・高校英語教員

①日本：京都府・滋賀県・大阪府・兵庫県・奈良県で教壇に立つ中学校・高校英語教員 214 名。

②韓国：中等学校英語教員 240 名（韓国教育大学、啓明大学、京畿大学、ソウル特別市教員研修院、ソウル特別市教育庁関係者の協力を得て調査を実施）。

回答者の職歴及び教職経験年数の詳細は表 2 の通りである。中学校・高校の校種及び経験年数のバランスは概ねとれている。

ウ　調査方法　郵送及び直接配布による質問紙法

(2) 調査内容

調査内容は、背景的情報（性別、勤務形態、職種、教職歴、学位、専攻、採用試験受験の有無など）と、以下のような 2 部で構成されている（Appendix 参照）。

Section A：日本及び韓国の教員採用試験制度に関して

Section B：5 種類の教員採用（英語専門筆記）試験問題の質問形式、内容、有効性について

本稿では、日韓の教員採用試験制度（Section A）のみ取り扱うこととする。質問は、①英語専門筆記試験、②2 次実技試験（面接・スピーチなど）、③授業案の作成、④模擬授業、⑤標準テスト（TOEFL・TOEIC など）の活用、⑥標準テストの

表 2　調査対象（日韓英語教員）

（日本）

職　種	人　数	%	教職経験年数	人　数	%
小学校英語教員	0	0	1 ～ 5 年	60	28.0
中学校英語教員	106	49.5	6 ～ 10 年	31	14.5
高校英語教員	101	47.2	11 ～ 15 年	32	15.0
指導主事・研究主事	3	1.4	16 ～ 20 年	24	11.2
その他	4	1.9	21 年以上	67	31.3
合　計	214	100	合　計	214	100

（韓国）

職　種	人　数	%	教職経験年数	人　数	%
小学校英語教員	1	0.4	1 ～ 5 年	41	17.1
中学校英語教員	100	41.7	6 ～ 10 年	45	18.8
高校英語教員	127	52.9	11 ～ 15 年	24	10.0
指導主事・研究主事	0	0.0	16 ～ 20 年	29	12.1
その他	4	1.7	21 年以上	50	20.8
無回答	8	3.3	無回答	51	21.3
合　計	240	100	合　計	240	100

活用方法の6項目である。

5　分析と考察

(1) 英語専門筆記試験[2)]

質問①は「英語教員採用試験（英語専門筆記）の難易度はどの程度だと思われますか」という内容である。「簡単」から「難しい」までを5段階尺度で回答し、併せてその理由を説明するものである。

まず、図2が示すように、日本の場合は、試験難易度が「ちょうどよい」とする者が52.3%、韓国は41.8%を占めている。「どちらかと言えば難しい」・「難しい」と評価する者は、日本は37%、韓国は50.9%となっている。したがって、両国の試験は決して簡単ではなく、むしろ難しい。どちらかと言えば、韓国の方が、実感として難しいことになる。

図2　英語専門筆記試験

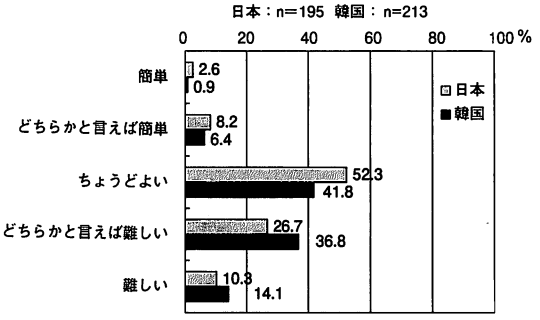


表3は回答理由をまとめたものである。日本の場合は、「適切である」（第1位：23.3%）、あるいは「英語力の測定に有効である」（第2位：18.6%）といった総論的な回答が多く、しかも判断の根拠や理由を明確しないのは意味深い。また、「英文そのものが難しい」（第3位:16.3%）、「語彙・熟語が難しい」（第6位：7.8%）という英語レベルの問題、あるいは「時間足りない」（第4位：12.4%）、「問題量が多い」（第5位：10.1%）という試験時間や量に関する問題について、各論的な指摘も少なくはない。いずれにせよ、総じて、日本の教員は英語専門筆記試験＝英語力試験として理解していることがわかる。以下は、その代表的な回答例である。

—「大学入試の焼き直しの様な感じのテストでそれに向けて勉強したという記憶もない。」

—「全般的に難易度が高く、落とすための試験である。日常コミュニケーションにおいて使用度の高いものに厳選しても良いのではないか？」　※下線は筆者による。以下同様。

これらの言及は日本の英語専門筆記試験の性格を端的に言い表しているように思われる。すなわち、大学入試に似たタイプの英語試験で、難易度が高く、落とすための試験だというのである。

さらに、英語教育に関わる専門性、試験の妥当性・有効性、評価内容・方法・基準についての言及がほとんどないのは特徴的である。以下は、それらについて改善を促す数少ない回答である。

表3　英語専門筆記試験

（日本） n=171

順位	内　容	人数（%）
1	適切である。	30（23.3%）
2	英語力の測定には有効である。	24（18.6%）
3	英語（英文）が難しい。	21（16.3%）
4	時間が足りない。	16（12.4%）
5	問題量が多い。	13（10.1%）
6	語彙・熟語が難しい。	10（7.8%）
7	簡単である。	9（7.0%）
8	専門的な知識が必要である。	6（4.7%）
9	リスニングが聞き取りにくい。	5（3.9%）
10	英文読解が多い。	4（3.1%）

※複数回答あり。

（韓国） n=176

順位	内　容	人数（%）
1	教科の専門的知識が必要である。	65（36.9%）
2	英語力を必要とする。	52（29.5%）
3	試験範囲が多様かつ包括的である。	24（13.6%）
3	解答は文脈から容易に推測できる。	24（13.6%）
5	基本的な問題なので簡単である。	16（9.1%）
6	競争率が高い。	11（6.3%）
6	試験準備が必要である。	11（6.3%）
8	記述問題は難しい。	9（5.1%）
9	分量が多い。	6（3.4%）
10	現場の実践とは異なる。	6（3.4%）
10	英語は易しい。	6（3.4%）

—「TOEIC、TOEFL、英検などはテストの性格がはっきりしているが、教員採用（1次専門筆記）試験はそうでない。受験者にこれを勉強しなさいとはっきりメッセージが欲しい。また、平均点、合格点、配点など公開しないのは、受験者側からすると、非常に取り組みづらい。（中略）やはり、言語教授に関する知識などを問う問題も必要である。」

これに対して、韓国の採用試験の場合は、「英語力を必要とする」（第2位：29.5%）のは当然のこととして、「教科の専門的知識が必要である」（第1位：36.9%）、「試験範囲が多様かつ包括的である」（第3位：13.0%）とあるように、試験の性格上、幅広い英語教育や英語学などの高い専門性が求められていることがわかる（脇田2008；脇田2009参照）。以下は、その代表的回答である。

—「現場中心でない理論中心の問題が多い。」

—「一般英語は普通の水準、専攻英語は範囲が膨大。専攻英語は授業に活用できる問題というより専攻に関する知識の問題が多かった。」

反対に、「解答は文脈から容易に推測できる」（第3位：13.6%）、「基本的な問題なので簡単である」（第5位：9.1%）という回答もある。これは、韓国の試験が専門的で、かつ問題がパターン化しており、それゆえに試験準備を十分に行えばありふれた問題であることを示唆している。以下は、その代表的回答例である。

—「問題の設問自体は簡単な英語で出来ているが、一般英語、英語学、英文学、教科教育など多様な分野の知識をパターン化した正確な解答を要求する質問が多い。」

—「ほとんど大部分が本文をよく読み、解答を類推できる。すなわち、ほとんどの質問は専門的知識がなくても解くことが可能なので、一般英語力（読解）が飛び抜けているなら大きな難はない。」

(2) 2次実技試験（英会話・スピーチなど）[3)]

質問②は「2次試験で英会話（面接形式・討論形式）、英文音読＋質疑応答、スピーチなどの実技試験を行うことに賛成ですか。」という内容であり、「賛成」から「反対」までを5段階尺度で回答し、併せてその理由を説明するものである。

図3は日本と韓国の間で対照的な違いを示す。日本の場合は、この実技試験について、「賛成」が68.1%、「どちらかと言えば賛成」が20.2%、合計すると88.3%の教員が肯定的に捉えている。表4が示すように、その理由は比較的単純で、第1位から第7位までは、コミュニケーション能力、TT、使える英語、スピーキング力、英会話力、4技能のバランス、実技能力など、表現こそ異なるが、近年のコミュニケーション能力重視の動きとあいまって、筆記試験では測れない英語運用能力の評価が重要であるという共通認識があるのだと思われる。以下は、その代表的回答である。

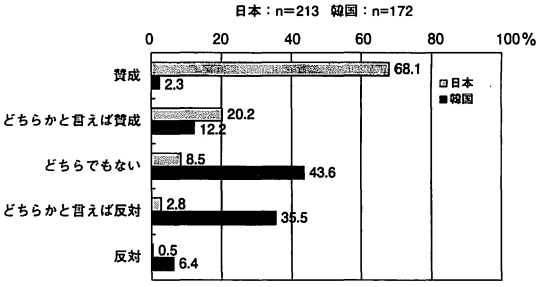
—「実践的コミュニケーション能力を生徒につけさせるために教師もしっかり力をつけている必要がある。実際、ALTとの授業の打ち合わせなどでも不可欠なものであるから。」

—「会話の出来ない英語教員というのは実験できない理科教員、ピアノの弾けない音楽教員と同じくありえない。会話ができれば教員にふさわしいというわけではないが、できなければ完全に不適切であると思う。」

なお、若干ではあるが、評価方法や質問内容の不公平さ、留学経験者に有利だという実技試験そのもの問題点を指摘する者もいる。

これに対して、韓国の場合は、逆に積極的に支持する者はほとんどいない。「反対」が6.4%、「どちらかと言えば反対」が35.5%、合計41.9%を占め、否定的な意見がかなり多い。その理由としては、日本のように英語運用能力の必要性（第1位：23.1%）は認識していても、「教育学や英語教育などの専門的知識が必要である」（第1位：23.1%）とあるように、問題は面接内容の専門性にある。しかし、英語専門筆記試験の場合と同様に、「一般常識の基本的な問題である」（第3位：

図3　2次実技試験（面接・スピーチなど）



19.8%)、「質問内容は予想・準備可能である」(第3位：19.8%)、「質問がパターン化している」(第5位：6.6%) といった批判もある。以下は、その代表的回答例である。

—「4年前、2次試験を直接受けたものとして、2次試験の難易度は確実に易しいといえる。特に、予想可能な問題があるので、ほとんど全てのinterviewee は模範答案を覚えてインタビューに参加するのが実状である。」

—「予想可能な時事問題および教育学の基礎常識、そして基礎的な英語専攻知識」

(3) 授業案の作成[4)]

質問③は「2次試験で実際の教材を使って授業案を作成することについて賛成ですか。」という内容であり、「賛成」から「反対」までを5段階尺度で回答し、その理由を説明するものである。

図4が示すように、上述の2次実技試験に対する場合と同様に、日韓教員の反応は顕著な違いを見せている。日本の場合は、「賛成」が28.3%、「どちらかと言えば」が30.2%、合計58.5% と、多くの教員が肯定的に捉えている。その理由としては、「授業力 (構想・展開・指導技術など) を評価するのに有効である。」(第1位：33.7%)、「教科指導力を評価するのに有効である。」(第4位：11.8%) ということであろう。一方、「授業は現場で経験を積んでいくものである。」(第2位：19.3%) という反対意見も少なくはないが、この意見は、おそらく、賛成であるが経験を積むことが大事であるという指摘だと思われる。また「講

表4　2次実技試験 (面接・スピーチなど)

(日本) n=195

順位	内　容	人数 (%)
1	コミュニケーション能力が必要である。	46 (23.6%)
2	ALTとのTTなど授業で必要である。	29 (14.9%)
3	使える英語が求められている。	22 (11.3%)
4	スピーキング能力が必要である。	19 (9.7%)
5	英会話力が必要である。	16 (8.2%)
6	4技能のバランスが大事である。	14 (7.2%)
7	実技能力を評価する必要がある。	11 (5.6%)
8	資質・人物を評価する機会となる。	6 (3.1%)
9	心理的に負担がある。	5 (2.2%)
9	評価方法に疑問がある。	5 (2.2%)

※複数回答あり。

(韓国) n=91

順位	内　容	人数 (%)
1	英会話力が必要である。	21 (23.1%)
1	教育学や英語教育などの専門的知識が必要である。	21 (23.1%)
3	基本的な一般常識の問題である。	18 (19.8%)
3	質問の内容が予想・準備可能である。	18 (19.8%)
5	質問がパターン化している。	6 (6.6%)
5	配点が低い。	6 (6.6%)
7	授業経験が必要である。	4 (4.4%)
7	即答しなければならないので時間的制約がある。	4 (4.4%)
9	心理的負担になる。	2 (2.2%)
9	評価基準が不明確である。	2 (2.2%)

※複数回答あり。

師経験者に有利に働く」（第3位：12.3%）の他、評価内容・基準や時間的制約の問題を指摘する者もいる。以下は、代表的回答例である。

—「教師の本分は当該教科の授業である。これなくして教師とは言えない。よって、教材の展開法や指導のポイントを見抜く力は最低必要であり、授業実践力は必要である。ただし、授業力は経験と共に伸びるものであるので、新卒者にそれなりの力を求めるのは難しいかもしれない。しかし、教師となって　3年程立っても授業力に問題のある人はそれ以降も伸びないと思う。」

—「授業での教材の使い方などを見ることが出来るから。ただ評価の仕方が難しいと予測される。」

—「単なる英語力だけでなく、教師としての資質を見るために授業案を作成することには賛成であるが、講師経験のある者が有利になり、学生が採用試験に合格出来なくなる可能性もあるので慎重にすべきである。」

—「時間的に無理がある気がする。その短時間で考えた案で判断されると経験の差が浮き彫りになる気がする。」

これに対して、韓国は、「どちらでもない」が55%と多数を占めるが、否定的な見解を持つ教員も35.5%と多い。その理由は様々で、「指導案を作成するのに時間的制約がある」（第2位：14%）こと、「実際の授業経験が必要である」（第3位：10.8%）こと、「授業を構成する創造性が要

図4　授業案の作成

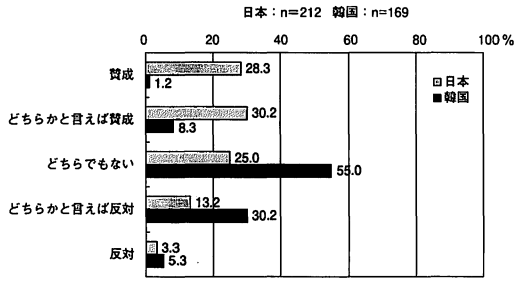


表5　授業案の作成

（日本） n=187

順位	内　容	人数（%）
1	授業力（構想・展開・指導技術など）を評価するのに有効である。	63（33.7%）
2	授業は現場で経験を積んでいくものである。	36（19.3%）
3	講師経験者に有利であり、不公平である。	23（12.3%）
4	教科指導力を評価するのに有効である。	22（11.8%）
5	適性・資質を見るのに有効である。	14（7.5%）
6	指導案は不必要である。	12（6.4%）
7	評価内容・基準が不明確である。	10（5.3%）
8	準備時間に無理がある。	9（4.8%）

※複数回答あり。

（韓国） n=93

順位	内　容	人数（%）
1	基本的な形式があり、事前に準備が可能である。	49（52.7%）
2	指導案を作成するのに時間的制約がある。	13（14.0%）
3	実際の授業経験が必要である。	10（10.8%）
4	授業を構想する創造性が要求される。	9（9.7%）
5	教科指導力を評価するのに適切である	6（6.5%）
6	配点が低い。	2（2.2%）
7	評価内容・基準が不明確である。	1（1.1%）

※複数回答あり。

求される」(第4位:9.7%) こと、「配点が低い」(第6位:2.2%) ことなどが挙げられている。以下は、代表的な回答例である。

—「教師として教材研究をする時は十分な時間をかけて授業計画を組むのに、試験では初めて見る教材内容を与えられ、短時間内に授業案および授業方法、全体の流れ、そして生徒達の反応に対してもすべて構想をしなければならない。このすべてを含めて授業案を作成するのは簡単でない。」

—「即席で授業を設計しなければならないので、蓄積した知識が多くなければ、適切に対処できない。」

一方で、「基本的な形式があり、事前に準備が可能である」という回答が第1位 (52.7%) を占めることから、韓国の指導案作成に係る試験も、他の試験と同様に、パターン化していると判断される。以下は、その代表的な回答例である。

—「試験回数が累積されるにつれ、定形化して模範解答みたいなものが出回っているので、別に難しくないと思う。」

—「ある程度要求する形式があり、一度形式に慣れたら、自分の資料を適用して作ればよい。」

(4) 模擬授業[5)]

質問④は「授業案作成と併せて、2次試験で模擬授業を実施することについて賛成ですか。」という内容であり、「賛成」から「反対」までを5段階尺度で回答し、併せてその理由を説明するものである。

図5が示すように、この模擬授業についても、日本と韓国では対照的な違いがある。日本の場合は「賛成」が41.5%、「どちらかと言えば賛成」が34.4%、合計75.9%とほとんどの者が肯定的に受け止めている。一方、韓国は、「どちらでもない」が49.1%、どちらかと言えば反対」が33.5%、「反対」が9.9%を占め、肯定的な意見はわずか7.5%しかない。

表6はその回答理由である。確かに、短時間の模擬授業で本当の指導力を見ることは難しく、「授業は現場で積んでいくものである」(第3位:8.2%) というのは正論であるが、日本の教員の約44%は、模擬授業は「授業力を評価するのに有効である」(第1位) という点で意見が一致している。また、「適正・資質・人物を評価するのに有効である」(第2位) とする者も26.8%と少なくはない。以下は、その代表的な回答である。

—「知識と実技は別ものなので実際に教壇に立った姿を評価する必要はあると思う。」

—「それぞれの個性・性格が授業には自然と現れるので、教員としての資質を測るために必要。授業の内容だけではなく、話し方や言葉遣い・目の配り方などの所作も確認できる。」

その他、模擬授業の評価内容・方法・基準を明確にするべきであるとか、教科の採用であるので教科に関する模擬授業にするべきであるといった意見も、少数ではあるが、看過できない。

これに対して、韓国の場合は、日本のように「適正・資質を見るのに有効である」とか「授業が現場で積んでいくものである」といった意見は少なく、むしろ試験の形式・方法・内容など関わる各論的な否定的意見が多く見られる。例えば、「時間が短く、実際の授業とは異なり、不自然。即興的な演技力が必要である。」(第1位:25.8%)、「パターン化していて、暗記をして練習・準備をすればよい。」(第2位:19.4%)、「授業までの準備時間が短い。」(第5位:6.5%) といった意見が代表的なものである。

—「試験当時教職経験がまったくない状態でclassroom situationを想定すること自体難しかったし、教案の作成後、まさに提出して2時間後に記憶に依存して授業を進行するのも、容易ではなかった。」

—「学生達がいない状況で1人授業試演をしなければならない。実際の授業のように、学生達の反応がないのでただ1人で演劇をするよう

図5 模擬授業

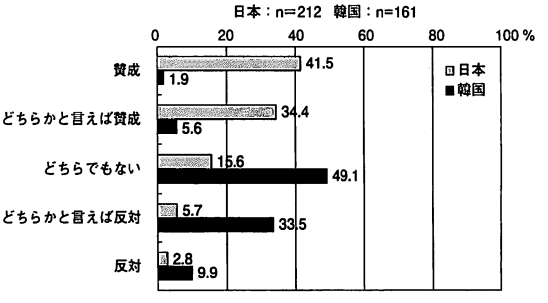


表6　模擬授業

（日本） n=183

順位	内　容	人数（%）
1	授業力（構想・展開・指導技術など）を評価するのに有効である。	80（43.7%）
2	適性・資質・人物を見るのに有効である。	49（26.8%）
3	授業は現場で経験を積んでいくものである。	15（8.2%）
4	講師経験者に有利であり、不公平である。	14（7.7%）
5	準備時間などの制約がある。	11（6.0%）
6	評価内容・基準が不明確である。	5（2.7%）

※複数回答あり。

（韓国） n=84

順位	内　容	人数（%）
1	時間が短く、実際の授業とは異なり、不自然。即興的な演技力がいる。	24（25.8%）
2	パターン化していて、暗記をして練習・準備をすればよい。	18（19.4%）
3	授業は現場で経験を積んでいくものである。	11（11.8%）
4	授業力を評価するのに有効である。	10（10.8%）
5	模擬授業までの準備時間が短い。	6（6.5%）
5	緊張し、心理的に負担である。模擬授業までの準備時間が短い。	6（6.5%）
5	簡単である。	6（6.5%）
8	英語運用能力が必要である。	3（3.2%）
9	適性・資質・人物を見るのに有効である。	2（2.2%）
10	評価内容・基準が不明確である。	1（1.1%）

※複数回答あり。

な気分になる。」

—「数多くの授業法があるだろうし、またある授業を準備する時は時間も必要であり、非常に多くの研究が必要と思う。試験を受ける場所でなんの準備もなく授業案を考える（作る）のは非常に難しい作業であると思う。」

(5) 標準テストの活用

質問⑤は「英語教員採用試験（英語専門筆記）に加えて、標準テスト（TOEFL・TOEIC など）を活用することに賛成ですか」という内容であり、「賛成」と「反対」の2者択一で回答し、その理由を説明するものである。

図6が示すように、日本の場合は賛否相半ばする。一方、韓国は、賛成が64.5%、反対が35.5%と標準テストの活用を支持する者の方が多い。表7は標準テストの活用の是非に関する理由を集約したものである。賛成理由としては、まず両国ともに標準テストに「英語力の客観的指標」としての意義を見いだしている。日本の場合、第1位から第3位まではほぼ同様の回答と判断され、合計すると全回答者の半数（49%）に上る。韓国の場合は、第1位と第2位がこの回答に該当すると考えると、合計69.3%と、非常に多くの教員が英語力測定試験として標準テストを支持する。次に、「テストの持つ信頼性・妥当性」や「英語力をつけるための動機付け」として意義を見いだす者も、日韓ともに少ないながらも、一定数ある。以下は、賛成者からの声である。

（賛成理由）

—「テストの信頼度に優れる。受験者数、明確性、認知度など。」（日本）

—「受験時に確認してもらいたいのは受験者の英語力の有無。現場に出れば、授業案はいくらでも考えることができる。AETと普段の会話ができない教師を採用すると生徒も教師も

みんなが大変である。」（日本）

—「都道府県の教育委員会が作成する試験や問題は有効であると思うが、いわゆる標準テストで国際的な立場からのテストを加えることで、国際人としての英語力の位置づけができると思う。」（日本）

—「23問の採用試験では新規採用教師の英語能力を十分に評価できない。」（韓国）

—「英語教師の基本的な英語能力を評価する客観的な成績が証明になる。」（韓国）

—「英語教師として公認された英語資格を備えているのは基本的なことである。採用試験では基本的な聴解、読解、文法、語彙能力を測定する問題を多く扱うのに無理があるので、公

図6　標準テストの活用

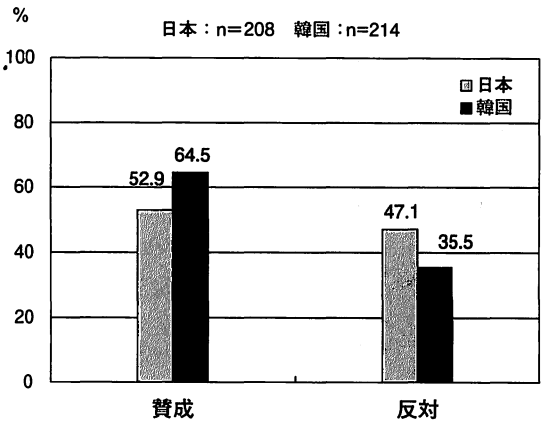


表7　標準テストの活用

（日本） 賛成：n=110　反対：n=98

順位	賛成理由	人数（%）	順位	反対理由	人数（%）
1	英語力の一般的指標となる。	33（21.8%）	1	指導力とは一致しない。	23（23.5%）
2	客観性がある。	16（14.5%）	2	テストの目的が異なる。	21（21.4%）
3	英語力を測定する機会となる。	14（12.7%）	3	採用試験だけで十分である。	9（9.2%）
4	信頼性がある。	10（9.1%）	4	経済的・時間的に負担である。	8（8.2%）
5	参考として使用する。	9（8.2%）	5	TOEICなどを選択する理由が不明。	5（5.1%）
6	妥当性がある。	6（5.5%）	5	点数至上主義に陥る。	5（5.1%）
7	動機付けの向上につながる。	3（2.7%）	6	教師に必要な英語力とは違う。	4（4.1%）
8	4技能を測定できる。	2（1.8%）	7	テストは傾向と対策がものを言う。	2（2.0%）
8	英語力の向上になる。	2（1.8%）	7	テストに深みがない。	2（2.0%）
10	試験目的が明確である。	1（0.9%）	9	人物を重視するべきである。	1（1.0%）

※複数回答あり。

（韓国） 賛成：n=114　反対：n=59

順位	賛成理由	人数（%）	順位	反対理由	人数（%）
1	英語力の客観的指標となる。	53（46.5%）	1	資質・能力を反映していない。	16（27.1%）
2	英語力が測定できる。	26（22.8%）	2	時間費用などの負担がある。	13（22.0%）
3	英語力の向上に役立つ。	17（14.9%）	3	技術主義に陥る。	9（15.3%）
4	信頼性がある。	6（5.3%）	4	指導力とは一致しない。	7（11.9%）
5	妥当性がある。	3（2.6%）	4	英語力を正しく測定できない。	7（11.9%）
5	受験機会が複数ある。	3（2.6%）	6	採用試験と重複する。	4（6.8%）
7	4技能の測定に有効である。	2（1.8%）	6	知識偏重に陥る。	4（6.8%）
7	実用性がある。	2（1.8%）	8	否定的な波及効果が大きい。	2（3.4%）
9	参考として使用する。	1（0.9%）	9	テストの目的が異なる。	1（1.7%）
9	水準が確保できる。	1（0.9%）	9	参考として使用する。	1（1.7%）

※複数回答あり。

式的な尺度を通してこれらを評価するのは良い。」（韓国）

次に、反対理由としては、日韓共に現場での指導力や資質能力を反映していないことが第1位（日本：23.5%、韓国：27.1%）を占める。その他、「採用試験と重複する」こと、「テストの目的が異なる」こと、「テスト偏重」になり「成果主義・技術主義的な傾向に陥る」弊害、「時間や費用の負担」などが挙げられており、日韓共に反対する理由は類似している。以下は、代表的な反対理由である。

（反対理由）

—「高い英語習得能力も必要だと思うが、それだけでは現場では通じない。人格はもちろん、英語以外の幅広い知識、やる気、あらゆるものを吸収しようという力などが現場では必要である。「英語能力が高いこと」と「生徒に対する教育力があるか」ということはイコールではない。」（日本）

—「現場にどのようにその知識を利用しようというのかよく分からない。留学経験のある者、標準テストに慣れた者に有利である（中略）英語能力の高さと指導力の高さが同じとは言えないと思う。」（日本）

—「このような試験は要領ややり方によって点数が変わるので本当の実力の測定が難しい。」

—「標準テストが英語の実力の基本尺度とは思わない。（中略）教師の専門性と一致する教師の英語力を測定する英語試験を総合的に見るのが良いと思う。」（韓国）

—「標準テストの成績は、教師の専門的な教授法、授業準備、授業、評価に大きく左右される学校現場での教師の質を決定するのにほとんど役割を果たさない。」（韓国）

—「英語教師の実力とは関係なく費用をかけて幾度か試験を受けると成績が向上する。経済的負担も大きい。」（韓国）

(6) 標準テストの活用方法

質問⑥は、「賛成の場合、英語教員を選考する過程で、標準テストをどのように活用すれば最も効果的と考えるか」、活用方法について意見を求めたものである。

日本の場合は、現行のように英語特化基準点を設定するが、1次試験などの免除要件とはせずに、「基準得点を設定し、採用試験の受験資格とする」という回答が第1位（37%）である。そうすれば、当然、英語専門試験は標準テストでは測れない記述形式の問題であったり、英語教育の専門性を評価したりすることが可能になる。第2位（21%）は「同点時の判定などに参考として使用する」という慎重論である。これは標準テストの目的が採用試験とは異なることや、標準テストの成績がかならずしも指導力とは一致しないという意見が反映されている。第3位（13%）は「採用試験と標準テストを総合して判定する」という意見である。いずれにせよ、現行のように標準テストの特化基準を設けて1次試験などを免除するような意見はそれほど多くない。以下は、代表的な意見である。

—「標準テストはひとつのスケールで最低限必要となる英語力を示すものであれば良いと思う。実際に大切なのはその力を授業で活かすことができるかどうかであると思うので、コミュニケーション能力を含めた多角的な試験があるべき姿だと思う。」

—「基準点を設定してその点数を越えることを条件とする。専門筆記では作文などTOEFLなどでははかれない形式設問を取り入れられる。」

—「あくまでも英語力の参考に。TOEIC○○点以上で筆記免除などはおかしい。英語教師として求められるのはマークシートでの英語力ではない。」

—「英語力を見る1つの指標として複数組み合わせて妥当性を高めるのがよい。」

その他の意見として、英語教員だけに採用試験以外に標準テストの受験を義務づけることは他教科と比べて不公平であるという意見、またTOEIC、TOEFL、英検などの標準テスト間の相互互換性や基準点の妥当性の問題などが指摘されている。

—「基準点を設定し、採用試験の条件とするか、標準テストのスコアを採用試験の点数にプラスする。ただ、英語教員のみ採用試験以外のテストを受けなくてはならなくなり、他教科と不公平が生じてしまうという問題も出てく

表8　標準テストの活用方法

（日本） n=100

順位	内　容	人数（%）
1	基準得点を設定し、採用試験の受験資格とする。	37（37.0%）
2	出願時に点数を明記し、同点時の判定などに参考として使用する。	21（21.0%）
3	採用試験と標準テストを総合して判定する。	13（13.0%）
4	得点に従って一定の点数を加算する。	12（12.0%）
4	設定した基準得点を一次試験などの免除要件とする。	12（12.0%）

※複数回答あり。

（韓国） n=127

順位	内　容	人数（%）
1	現行システムと同様、得点に従って一定の点数を加算する。	52（40.9%）
2	採用試験と標準テストを総合して判定する。	38（29.9%）
3	基準得点を設定し、採用試験の受験資格とする。	22（17.3%）
4	出願時に点数を明記し、同点時の判定などに参考として使用する。	8（6.3%）
5	一次試験の一部（英語力やListeningなど）に置き換える。	4（3.1%）

※複数回答あり。

る。」

—「①TOEIC○○点以上を出願資格とする場合。ただし、その点数の妥当性を説明する必要があるし、なぜTOEICなのか、英検ではいけないのかといった問題もある。②TOEICなどの点数を総合判定の際の点数に加える方が、説得力あるように思える。しかし、点数などの妥当性の問題がある。」

これに対して、韓国は「現行システムと同様に、得点に従って一定の得点を加算する」という者が第1位（40.9%）と多数を占める。これは、標準テストの客観性・信頼性を容認しつつも、それを採用の判定材料として頼りすぎる弊害を懸念する声が反映していると思われる。それゆえに、現行制度のようなボーナス点程度にとどめるのが無難ということなのであろう。第2位は、「採用試験と標準テストを総合して判定する」意見であり、その比率（29.9%）は少なくはない。さらに、「基準点を設定し、採用試験の受験資格とする」者が第3位（17.3%）と続く。ただし、いずれの場合にも、標準テストの活用に全面的に賛成しているのではないことは注意を要する。以下は、そのような回答例である。

—「加算点。公認点数があまりに大きい比重を占めると、必要な教授方法を勉強するよりむしろ公認試験だけに頼る問題が発生しうる。」

—「客観的な資料ではあるが、あまりにも多い比率で適用するのは大きな負担になるので、同点者の処理時に弁別資料として活用するのが望ましい。」

—「専門試験の得点中、言語能力の部分を置き換える。」

6　まとめ

以上が、日韓（英語）教員採用試験に関する意識調査（Section A）の分析・考察である。

上述のように、教員採用試験は多様な力量を持った人材の確保のために選考方法を多様化し、選考尺度の多元化を図る方向性からも、1次・2次で実施される各試験の役割、相互補完性を明確にし、またそれぞれの有効性・妥当性を検証することは重要である。さらに、よく似た教育制度の下、優秀な教員を担保するために教員採用試験を実施している日韓の比較に基づいて、採用側からではなく、学校現場の英語教員の採用試験に対する意識を実証的に検証することは、これまでになかった研究である。

しかしながら、日韓の採用試験制度がよく似ていても、試験自体は単独で存在するのではない。それは、マクロな視点に立てば、両国の国民性、文化、教育的伝統から、外国語（英語）教育観、そして中学校・高校での英語教育課程、大学英語教員養成プログラムなどの制度やそれに係る諸政策などが色濃く反映されている。テスティングの観点から見ても、伝統的に英語試験は、日本がnorm-referenced test、韓国がcriteria-referenced testを採っていること自体、両国の試験に対する考え方や試験目的の違いを示す端的な例である。とはいえ、両国の本質的な相違点を認めつつも、本調査の結果が示唆するところは意味があると考える。それでは、以下、本調査の分析・考察結果の要点をまとめる。

①教員採用試験における標準テストの活用：日本の全国59都道府県市教員採用試験のうち37試験で英語特化基準が設定されている。基準点はTOEFL 550～610点、TOEIC 730～900点と幅があり、一定しておらず、ほとんどは文部科学省の目標数値よりかなり高い。また、免除内容も様々で一貫性がない。それゆえに、英語教員が備えておくべき英語力と標準テストの関連、各試験の点数の互換性の妥当性、及び教員採用試験での活用方法について研究を進める必要がある。韓国の場合は、標準テストを1次筆記試験の中で加算点（ボーナス点）として扱う。配点は130点中10点（2008年度以降は65～75点中5点）と低い。

②英語専門筆記試験：日韓の英語専門筆記試験の難易度は決して低くない。日本の教員の多くは、教員採用試験＝英語力測定試験として肯定的に受け止めている。しかし、大学入試に似たタイプの試験であり、英語教員の専門的知識や能力を問う問題は少ない。韓国の場合は、英語は平易であるが、英語教育や英語学などの幅広い専門的知識が求められ、試験範囲が多様かつ包括的である。しかし、問題がパターン化する傾向があり、試験準備を十分に行った者にはありふれた問題となっている。

③2次英語実技試験（面接・スピーチなど）：日韓の英語教員の意識には対照的な違いがある。日本の場合は、筆記試験では測れない英語運用能力を評価する方法として、9割近い教員が肯定的に受け止めている。反対に、韓国は否定的で、英語運用能力の必要性を認識しつつも、その試験内容が専門的であり、パターン化しているので事前に予測・準備可能であることを問題視している。

④指導案の作成：日韓の英語教員の意識には対照的な違いがある。日本の場合は、6割近い教員が、授業力を評価する手段として肯定的に受け止めている。一方、韓国の場合は、肯定する者はいない。むしろ否定的な意見を持つ教員は多い。その理由として、この試験には基本的形式があり、事前準備が可能であると指摘する者が約半数いる。また、短時間に、専門的知識、創造性、表現力などを発揮することが要求され、経験も必要であることを反対理由として挙げる教員もいる。

⑤模擬授業：日韓の英語教員の意識には対照的な違いがある。日本の場合は、授業力や適正・資質・人物の評価方法として、75.9%の教員が肯定的に捉えている。一方、韓国は9.9%と肯定的意見が極めて少ない。時間の短さ、不自然さ、パターン化、心理的負担など、試験自体の形式・方法・内容に関わる否定的な意見が多い。

⑥標準テストの活用の是非及びその方法：日韓ともに標準テストの活用を支持する教員は半数を超える。韓国は64.5%の支持率である。両国ともに標準テストは「英語力の客観的指標」となることが第1の賛成理由である。反対理由としては、「現場での指導力や資質能力を反映していない」ことが大きな理由であるが、その他標準テストの目的・妥当性への疑問、費用負担の問題などが挙げられ、これらの理由は日韓に共通する。活用方法については、日本の場合は、1次試験などの免除要件ではなく採用試験の受験資格とする回答が一番多く、韓国の場合は、加算点として扱うという意見が多い。

以上が分析・考察の概要であるが、要するに、日本の英語教員採用試験の場合は、英語力を基本として、適正・資質・人物を評価しようとする傾向が強く、英語教員としての専門的知識などはあまり要求されない。これに対して、韓国の場合は、脇田（2008; 2009）の研究からも明らかになったように、英語教員であるためには、英語力とともに、多様かつ広範囲な専門的知識を備えていることが第一の必要条件となっている。しかも、韓国

では、教員採用試験は試験としての公正さ、信頼性、妥当性が厳しく要求されるので、受験者（英語教員）の意識は自ずと試験そのものの形式・方法・内容などに向かう傾向がある。とりわけ2次試験（面接・スピーチなど、指導案作成、模擬授業）については、実践的能力が要求され、評価のガイドラインが明らかでないので、多くの批判が生まれる。この点に関しては、韓国が、数々の批判を受けて、2008年度から、知識偏重是正のために、現場主義の推進を掲げて、教員養成システムとともに、採用試験制度を抜本的に改編したことからも推察される（脇田2008参照）。

さて、このような日韓教員採用試験のどちらが、優秀な英語教員を担保する制度として、有効に機能するのか。これは、上述のように、それぞれの国の文化、国民性、教育的伝統などの違いがあるので一概には言えないが、本調査結果を踏まえて、良質な（英語）教員採用試験の研究開発という目的に沿って、日本の英語教員採用試験の改善に向けての提言及び今後の課題を以下に述べる。

①英語教員の一般英語力の評価については、試験目的の違いはあるとしても、より信頼性の高いTOEFLやTOEICなどを積極的に活用する。ただし、現行のような英語特化基準という方法ではなく、1次試験の前段階として一定の得点（TOEFL 550点、TOEIC 730点など）を英語専門筆記試験の受験資格基準点として使用する。なお、試験の特性を踏まえ，英語教員が備えておくべき英語力と外部検定試験との関連，各試験の点数互換の妥当性などを十分検証する必要がある。

②1次英語筆記試験では、英語力に偏った現行のような試験ではなく、英語教員に求められる専門的能力をより重視する。英語力については、脇田（2007）が指摘するように、単なる知識の「再現」ではなく、英語でエッセイを書いたり、内容要約をしたりするといった、読解力・要約力・語彙力・英作文力などの総合的能力、「認知的にも高度な力や応用力」を評価する必要があるだろう。

③1次英語筆記試験で最も改善すべき点は、英語教員が備えておくべき最低限の専門的知識や能力、特に外国語教授法、テスト・評価、教材分析・開発などについての理解と応用力を評価することが重要である[6]。この点については、韓国の採用試験は参考になる。

④優秀な人材を確保するには、筆記試験だけでは不十分であり、それを補完するために、多元的な実技試験を実施することは妥当である。しかし、実技試験において、日本が教員としての適正・能力・人物や実践力を、韓国が英語教員の専門的な指導力を重視しているという相違は顕著である。この点を踏まえて言えば、日本の場合、教科専門試験と言う以上、もう少し英語教員の専門性を重視する方向に変えるべきである。

⑤教員採用試験という特性を踏まえて、試験の信頼性・妥当性を高めるために、これまでの試験の有効性・妥当性を検証することが重要である。特に専門筆記試験においては、教科専門試験としての内容的妥当性を一層高める必要がある。そのためには、何らかの外的基準に基づいて、テスト内容の構成概念として何が最低限必要なのか合意する必要がある。

⑥したがって、韓国の英語教員資格基準（脇田2009）のような精緻なものとは言わないが、英語教員に求められる資質能力のガイドラインを策定し、その上で各都道府県市教育委員会が独自に有効な評価内容・方法・基準を決定することである。そうすれば、必然的に、試験としての公平性、信頼性、妥当性も向上する。英語教員資質能力基準の策定に当たっては、教科調査官や国立教育政策研究所担当者などの国レベルの関係者、指導主事・研究主事などの都道府県レベルの担当者、現職の中学校・高校教員代表者、そして英語教育に係わる研究者の連携・協力が必要である。この点については、韓国が韓国教育評価院と英語教育専門家が協力して、英語教員資格基準の策定とその評価方法・内容・基準について、十分な論議を尽くして、ガイドライン示したのは参考となる（脇田2009）。

⑦教員採用試験の評価内容・方法・基準の策定にあたっては、各都道府県市教育委員会は相互に協力連携を図るとともに[7]、現職教員・英語教育関連研究者などの協力を得て作問を行い、実施後は試験の有効性を検証するべきである。

最後に、教師力とは、JACET教育問題研究会（2006）が指摘するように、英語教員としての「専門的知識・技術・技能」と「人間性・教育的資質」

の二つのベクトルが総合されたものである。この2つの要素は相互不可分な関係にあり、「理想的にはバランスよく両者を向上させていくカリキュラム、シラバス、指導方法、指導体制を構築していく必要がある。」この意味で、本調査結果から明らかになったように、日本の教員採用試験は、英語教員としての「専門性」よりも、むしろ教員の「人間性・教育的資質」を重視する傾向が顕著であるが、総論として、バランスよく、教科の「専門性」をより重視する方向に改善を進めるべきであることを改めて強調しておきたい。

【注】

1）英語教育に関する具体的な動きは、中央教育審議会の「外国語教育の改善」に関する答申（1996年）に端を発し、その後、新学習指導要領に示された「実践的コミュニケーション能力」の育成(1998年)、「21世紀日本の構想」懇談会による英語第2公用語論(1999年3月～2000年1月)、英語指導方法など改善の推進に関する懇談会（2000年1月～2001年1月)、英語教育改革に関する懇談会（2002年1～5月)、「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想（2002年7月)、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画（2003年3月）へと続く。

2）日本の英語専門筆記試験はたいてい1次試験で実施され、2次試験では英語実技試験である。しかし、1次と2次の両方で実施したり、教養試験と同一時間内で実施したりと、実施方法が異なる場合もある。

3）2次実技試験については、韓国は全国16道・政令指定都市で何らかの形で実施されている。日本の場合は、全国64都道府県市のうち、中学校は64都道府県市、高校は53都道府県市で実施されている（文部科学省2009)。ただし、この実技試験には、リスニングを初めとして、スピーチ・ディベイト・ディスカッションなどが含まれる。

4）授業案作成については、韓国は統一して英語授業案を作成することが要求される。日本の場合は、1次専門筆記試験の中で、特定の授業場面や条件を設定して、英語指導案の一部を作成することがある。2次試験の中で指導案作成（学級活動、道徳指導などを課題とする指導案作成を含む）を単独に要求する場合は、全国64都道府県市のうち、中学校は15都道府県市、高校は17都道府県市と少ない（文部科学省2009)。これは、英語教員としての専門的指導力よりは、教員としての一般的資質・適正・能力を、面接、模擬授業、集団討論など多様な方法で評価する傾向があることに基づくと思われる。

5）模擬授業については、日本では、全国64都道府県市のうち、中学校は54都道府県市、高校は44都道府県市において、しかもほとんどが2次試験で実施されている。時間は3～10分程度である。しかし、教科の模擬授業とは限らず、道徳指導、学級活動などを課題とする場合も少なからずある。またこれ以外に、学校生活での様々な場面を想定した場面指導も36都道府県市で実施されている(文部科学省2009)。韓国の場合は、英語の模擬授業が必須であり、受験者は自分が書いた英語授業案に基づいて、その一部を数名の面接官の前で、10分程度、即興で演技することが求められる。

6）日本の中学校・高校英語教員の意識調査（脇田・松村2007）によれば、大学で学ぶべき科目として、オーラルコミュニケーション能力の向上を前提として、外国語教授方法論、外国語授業実践研究、ついで外国語教材分析・開発論、外国語能力測定・評価論などの実践力につながる科目を教えるべきだという意見が多いがわかった。ここからも、大学教員養成課程においては、英語力だけではなく、英語教員の専門性を高め、それを採用試験にも反映することが妥当であると考えられる。

7）教育職員養成審議会第3次答申（文部科学省1999）でも、「教員採用試験における一般の学力試験については，教員として最小限修得しておくべき基本的な事項に係る問題など良質なものであることが必要であり，良質な学力試験問題をより効率的に研究開発するため，都道府県教育委員会などが共同して学力試験問題の研究開発を行う方策について検討することも必要である。」と述べられている。

【参考文献】

秋山朝康（2009).「英語教員に求められる能力とは―教員採用試験（一次試験）の問題調査より―」『英語英文学』第36号、pp.15-29、立正女子大学英語英文学会（編)。

伊藤弥香・神保尚武（2004).「全国公立中・高の英語教員募集内容と採用の観点に関する調査」第1回JACET関東甲信越大会発表、於清泉女子大学。

JACET教育問題研究会[研究代表者:神保尚武](2006).『英語科教職課程における英語教授力の養成に関する実証的研究』平成17年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書。

河合忠仁（2004).『韓国の英語教育政策』、関西大学出版部。

望月通子・河合忠仁（2006).「外国語教員養成制度と専門能力開発に関する基礎研究―米国・カナダ・オーストリア・ニュージランド・シンガポール・マレーシア・韓国を中心として」『関西大学外国語教育研究』第11号、pp.13-40。

文部科学省（1999).「養成と採用・研修との連携の円滑

化について」2009/ 8/20 取得。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/yousei/index.htm
文部科学省（2009).「平成21年度公立学校教員採用選考試験の実施方法について」2009/ 8/20 取得。http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1217811.htm
及川　賢（2007).「教員採用試験（英語科）の傾向分析：埼玉県・さいたま市の場合」『埼玉大学紀要　教育学部』第56号（1)、pp.281-289。
大谷泰照、林桂子、相川真佐夫、東眞須美、沖原勝昭、河合忠仁、竹内慶子、武久文代（2004).『世界の外国語教育政策：日本の外国語教育の再構築に向けて』東信堂。
佐野通夫（2005).「韓国の教員養成」第41回日本比較教育学会大会発表、於日本大学。
佐野通夫（2005).「韓国の教員養成」『世界の教員養成　Ⅰアジア編』pp.35-57、日本教育大学協会。
笹島茂・大井恭子・古家貴雄・清水公男（2005).「公立学校英語教員採用試験の現状と課題—採用試験は機能しているか？—」第44回大学英語教育学会シンポジウム発表、於玉川大学。
東京アカデミー（2009).『教員採用試験　2009/2010最新ガイドブック』東京アカデミー。
脇田博文（2006).「英語教員に求められる能力とは何か—日韓英語教員採用試験に関する意識調査からの示唆—」.第36回中部地区英語教育学会和歌山大会、於和歌山大学教育学部。
脇田博文・松村省一（2007).「良質な教員採用試験（英語専門筆記）の研究開発—日韓英語教員採用試験に関する意識調査に基づいて—」『龍谷紀要』第29巻第1号、pp.31-51。
脇田博文（2008).「英語教員に求められる知識・能力とは何か—韓国中等学校教員任用選考試験（英語専門筆記）に関する実証的研究—」『龍谷紀要』第30巻第1号、pp.19-36。
脇田博文（2009).「中等学校英語教員に求められる資質・能力とは何か（その2）—韓国中等学校任用試験制度の改革に伴う英語教員資格基準と評価方法の研究開発—」『龍谷紀要』第31巻第1号、pp.181-202。
渡辺良典（2008).『英語教員に必要とされる実践的英語能力のニーズ分析と英語教員採用試験試行作成版』平成17-19年度科学研究費補助金研究成果報告書。
Bartel, N. (2005). *Applied Lingustics and Language Teacher Education.* Springer.
Cho, D. (2004). Use of Standardized Tests as University Graduation Requirement. *English Teaching*, 59, 1, pp. 251-265.
Freeman, D. & Richards, J.C. (1996). *Teacher Learning and Language Teaching*. Cambridge University Press.
Jung, Y. S. (2001). Toward an effective EFL teacher development program focusing on multimedia and the internet. *영어교육* 56 (4), pp.141-162.
Kam, H.W. and Wong, Ruth Y. L. (2004). English Education in South Korea. *English Language Teaching in East Asia Today: Changing Policies and Practice.* pp.241-261. Eastern Universities Press.
Kam, H. W. and Wong, Ruth Y. L. (2004). *Language Policies and Language Education:The Impact in East Asian Countries in the Next Decade.* Eastern Universities Press.
Kim, H. S., Lee M. H., Hwan, G. H., & Cha, S. H. (2000). A Study on the Establishment and Operational Strategy of National Accreditation Center for Teacher Education Insititutes. Seoul: Korean Educational Development Institute.
Kim, E. G, & Han, Y. K. (2002). *Attracting, developing and relating effective teachers: Background report for Korea.* Seoul: Korean Educational Development Institute.
Kwon, O. (2000). Korea's English education policy changes in the 1990s: Innovations to gear the nation for the 21st century. *English Teaching,* 55 /1: 47-91.
National Board for Professional Teaching Standards. (2008). Retrieved on March 12, 2008, from http://www.nbpts.org.
Oi, K., & Sasajima, S. (2004). *Comparison of Teacher Employment Exams between Japan and Korea.* Paper presented at the 2nd Asia TEFL International Conference, Seoul Olympic Parktel, Seoul.
The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2006). Looking for attractive teachers. Retrieved on October 10, 2006, from *http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301.htm.*
Tsui, Amy B. M. (2003). *Understanding Expertise in Teaching: Case Studies of ESL Teachers.* Cambridge University Press.
Wakita, H. & Matsumura, S. (2005). Validating the Employment Examinations for Japanese Secondary School Teachers of English. Paper presented at the 3rd Asia TEFL International Conference in Beijing, November 5th.
Matsumura, S. & Wakita, H. (2006). What are the qualities of "quality" EFL teachers? Paper presented at the 14th Annual KOTESOL International Conference in Seoul, October 28th.
Matsumura, S. & Wakita, H. (2007). What are the qualities of "quality" EFL teachers? 兵庫教育大学『人文論集』第42巻第1・2号, pp.197-207.
이 현 (2004). 이현 Mapping 전공 영어 II, 북타운 .

이 현 (2006). 이현 Mapping 전공 영어 II, 북타운 .
이 현 (2006). 이현 Mapping 전공 영어 II, 북타운 .
이성원 & 오지희 (2007). 영어 교원 임용 고사 문항 출제 경향 분석 , 외국어교육 , 14 (1), 215-242.
김이경 외 (2004). 교원자격 양성 제도 개편 방안 연구 , 한국교육개발원 .
한국교육과정평가원 · 한국영어교육학회 (2008). *영어 과목의 교사자격기준 개발과 평가영역 상세화 및 수업능력평가 연구 보고서* (英語科目における教師資格基準の開発と評価領域詳細化および授業能力評価の研究報告書).
윤도형 (2005). 영어 교육학 전공 영어 I, 형설 .

【Appendix】※韓国版の質問紙は省略する。

良質な中学校・高等学校教員採用試験（英語専門筆記）の研究開発及びその波及効果に関する調査

この調査は、良質な中学校・高等学校教員採用試験（英語専門筆記）の研究開発とその波及効果の検証を目的とします。御多忙とは存じますが、先生方の御意見をお聞きしたいと存じますので、御協力の程をよろしくお願いします。

この調査は Section A と Section B に分かれています。回答方法には記述と選択の両方がありますので、選択肢の場合は回答欄に該当番号を御記入ください。自由記述の場合は、その内容を記述してください。また、回答はすべて回答冊子に御入ください。

【Section A】

1　背景情報

失礼とは存じますが、先生御自身の背景情報についてお聞きします。英語教員の場合は質問 4 を除くすべての質問に、大学生の方は質問 2・3・5 を除くすべての質問にお答えください。

Q1　性　別　1. 男性　2. 女性

Q2　勤務形態　1. 常勤　2. 非常勤

Q3　職　種　1. 小学校英語教員　2. 中学校英語教員　3. 高校英語教員　4. 研修主事・指導主事
5. その他（具体的に）＿＿＿＿＿＿

Q4　学　生　1. 4 年制学部　2. 博士課程前期（修士）　3. 博士課程後期（博士）
4. その他（具体的に）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q5　教職歴　1. 1～5 年　2. 6～10 年　3. 11～15 年　4. 16～20 年　5. 21 年以上

Q6　学　位　1. 学士（日本の大学）　2. 修士（日本の大学）　3. 博士（日本の大学）
4. 学士（外国の大学）　5. 修士（外国の大学）　6. 博士（外国の大学）
7. その他（TESL・TEFL の資格等、複数回答可）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Q7　専　攻　1. 主専攻 ＿＿＿＿＿＿　2. 副専攻 ＿＿＿＿＿＿

Q8　採用試験　中学校・高等学校教員採用試験を今までに受験されたことがありますか。「はい」の場合は受験された都道府県・政令指定都市名を書いてください。
1. はい ＿＿＿＿＿＿　2. いいえ

Q9　email address　※連絡あるいは報告用の目的として使用しますので、さしつかえなければお教えください。

2　日本の教員採用試験制度

日本の教員採用試験制度（通し番号 10～20）についてお聞きします。

質問 10－17 を回答する際には、御自身が受験した採用試験を参考にして回答してください。なお、複数受験した経験がある場合は、現職の中学校・高校がある都道府県の問題を基準としてください。

Q10　英語教員採用試験（英語専門筆記）の難易度はどの程度だと思われますか。
1. 簡単　2. どちらかと言えば簡単　3. ちょうどよい　4. どちらかと言えば難しい　5. 難しい

Q11　質問 10 の回答の理由を説明してください。また、その他に御意見・御感想があれば自由にお書きください。

Q12　2 次試験で英会話（面接形式・討論形式）、英文音読＋質疑応答、スピーチ等の実技試験を行うことに賛成ですか。
1. 賛成　2. どちらかと言えば賛成　3. どちらでもない　4. どちらかと言えば反対　5. 反対

Q13　質問 12 の回答の理由を説明してください。また、その他に御意見・御感想があれば自由にお書きください。

Q14　2 次試験で実際の教材を使って授業案を作成することについて賛成ですか。
1. 賛成　2. どちらかと言えば賛成　3. どちらでもない　4. どちらかと言えば反対　5. 反対

Q15　質問 14 の回答の理由を説明してください。また、その他に御意見・御感想があれば自由にお書きください。

Q16　授業案作成と併せて、2 次試験で模擬授業を実施することについて賛成ですか。
1. 賛成　2. どちらかと言えば賛成　3. どちらでもない　4. どちらかと言えば反対　5. 反対

Q17　質問 16 の回答の理由を説明してください。また、その他に御意見・御感想があれば自由にお書きください。

Q18　英語教員採用試験（英語専門筆記）に加えて、標準テスト(TOEFL・TOEIC 等)を活用することに賛成ですか。

1. 賛成　　2. 反対

Q19　質問 18 の回答の理由を説明してください。

Q20　賛成の場合、英語教員を選考する過程で、標準テストをどのように活用すれば最も効果的とお考えですか、御意見をお聞かせください。

【Section B】

以下に５種類の中等学校教員採用試験問題（英語専門筆記）があります（Sample Questions 1-5）。問題ごとに、形式、内容等について５つの質問がありますので御回答ください。<u>なお、試験問題そのものを解答していただく必要はありません。</u>

【Sample Question 1】

(A)　For each blank, choose the most suitable word from a-d to complete the sentence.

1. There is a very (　　) rule forbidding smoking in bed.
   a. severe　　b. strong　　c. hard　　d. strict

2. He really gets into things. (　　) he starts something, he's oblivious to everything else.
   a. Since　　b. Once　　c. While　　d. As long as

3. I pulled the knob and it just (　　).
   a. came off　b. went off　c. got on　　d. took on

4. It may be more (　　) to run several nights of overtime than to hire an additional employee for a temporary contract.
   a. cost-effective　　b. consuming　　c. attractive　d. specific

5. At (　　) time in my life have I been busier than I am today.
   a. any　　b. no　　c. other　　d. some

(B)　In the following sentences, choose the incorrect word from the underlined options A-D.

1. <u>It</u> is possible to be fluent while <u>make</u> grammatical mistakes, but it is better not <u>to</u>, of course.
   A　　B　　C
   To be a good speaker, you must <u>have</u> a good vocabulary.
   D

2. <u>Soon</u> or later we realize that <u>nothing</u> is permanent in human existence. Happy times do not
   A　　B
   <u>last</u> forever. Similarly, sorrows pass <u>away</u> and are soon forgotten.
   C　　D

3. <u>Which</u> team may win the <u>most</u> games in the qualifying rounds, that team <u>will represent</u> the
   A　　B　　C
   prefecture in <u>the</u> national tournament.
   D

【質問】

Q21　中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の<u>質問形式</u>（多肢選択方式）は適切だと思いますか。

1. 適切である　　2. どちらかと言えば適切である　　3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である　　5. 不適切である

Q22　質問 21 の回答の理由を説明してください。

Q23　中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の<u>内容</u>は適切だと思いますか。

1. 適切である　　2. どちらかと言えば適切である　　3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である　　5. 不適切である

Q24　質問 23 の回答の理由を説明してください。

Q25　この試験問題は、<u>中学校・高等学校の英語教員に求められるどのような能力を測定している</u>と思いますか。

【Sample Question 2】

Read passages (1) and (2) which are related to assessment and answer the question below.

(1) A middle school teacher gave an open-ended essay test as part of performance assessment for a formative purpose. Concerned that he might not have given marks to all the essays in a consistent manner, he decided to ask a colleague to mark the essays and compare the scores with his.

(2) A high school principal wanted to determine the effectiveness of a newly introduced writing program. To measure its quality in a reliable way, she developed two tests where items in each set had the same or similar levels of difficulty, discrimination and content coverage. Then she administered each test at the beginning and end of the program to elicit test data.

【Question】

Fill in the following underlined blanks (1) and (2) with the most appropriate word from the choices given below.

(1) _____reliability

(2) _____reliability

split-half, equivalent-form, intra-rater, inter-rater

【質問】

Q26 中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の質問形式は適切だと思いますか。

1. 適切である　2. どちらかと言えば適切である　3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である　5. 不適切である

Q27 質問 26 の回答の理由を説明してください。

Q28 中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の内容は適切だと思いますか。

1. 適切である　2. どちらかと言えば適切である　3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である　5. 不適切である

Q29 質問 28 の回答の理由を説明してください。

Q30 この問題は、中学校・高等学校の英語教員に求められるどのような能力を測定していると思いますか。

【Sample Question 3】

Read the extracts of lesson transcription and answer the question below.

[Teacher A]

T: So, now we're going to do some practice. Listen to me and repeat. "Bob is tall." "Bob is tall."
Ss: Bob is tall.
T: Good! Sue.
Ss: Sue is tall.
T: Good! Earrings. Mayumi?
S: Sue is earrings.
T: Is? Sue HAS earrings. Everyone?
Ss: She HAS earrings
T: Mary.
Ss: Mary HAS earrings.

[Teacher B]

T: OK. I'm going to point to someone and you make a statement about that person. Ready? Um...Ken, Mayumi?
S: Ken is handsome.
T: Is he? Yes, right. Midori. Yuji?
S: Midori has short hair.
T: She does? (shakes head)
S: Oh... Um... Hiroko has short hair.
T: Good. Repeat! Hiroko has short hair.
Ss: Tom has short hair.

T: teacher, S: a particular student, Ss:students

【Question】

Compare the two teachers' lessons in terms of instructional focus. Use approximately 25 words including "accuracy," "substitution," and "meaningful."

【質問】

Q31　中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の質問形式は適切だと思いますか。

1. 適切である　2. どちらかと言えば適切である　3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である　5. 不適切である

Q32　質問 31 の回答の理由を説明してください。

Q33　中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の内容は適切だと思いますか。

1. 適切である　2. どちらかと言えば適切である　3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である　5. 不適切である

Q34　質問 33 の回答の理由を説明してください。

Q35　この問題は、中学校・高等学校の英語教員に求められるどのような能力を測定していると思いますか。

【Sample Question 4】

You are going to teach "comparative sentences" to second-year junior high school students. Please describe in detail what kind of communicative activities you would use in a one-hour lesson. Note that the following information must be included in your description.

- How to allow students to have fun in the lesson.
- The kind of teaching materials (worksheet, pictures, etc.) to be used.
- The kind of interaction between students and the teacher to be expected.

【質問】

Q36　中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の質問形式は適切だと思いますか。

1. 適切である　2. どちらかと言えば適切である　3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である　5. 不適切である

Q37　質問 36 の回答の理由を説明してください。

Q38　中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の内容は適切だと思いますか。

1. 適切である　2. どちらかと言えば適切である　3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である　5. 不適切である

Q39　質問 38 の回答の理由を説明してください。

Q40　この問題は、中学校・高等学校の英語教員に求められるどのような能力を測定していると思いますか。

【Sample Question 5】

Read the following passage and answer the questions on the next page.

The child asks, "Who am I? Where did I come from? How did the world come into being? Who created people and all the animals? What is the purpose of life?" True, children ponder these vital questions not in the abstract, but mainly as they pertain to themselves. (1) They worry not whether there is justice for individuals, but whether they will be treated justly. Fairy tales provide answers to these pressing questions, many of which children become aware of only as they follow the stories.

From an adult point of view and in terms of modern science, the answers which fairy stories offer are fantastic rather than true. However, realistic explanations are usually incomprehensible to children, because they lack the abstract understanding required to make sense of them. While giving a scientifically correct answer makes adults think they have clarified things for the child, such explanations leave the young child confused, overpowered, and intellectually defeated. (2) Children can derive security only from the conviction that they understand now what perplexed them before --- never from being given facts which create new uncertainties.

It is therefore important to remember that only statements which are intelligible in terms of the child's existing knowledge and emotional preoccupations carry conviction for him or her. To tell a child that the earth floats in space, attracted by gravity into circling around the sun, but that the earth doesn't fall to the sun as the child falls to the ground, seems very (　3　). The child knows from experience that everything has to rest on something, or be held up by something. Only an explanation based on that knowledge can make the child feel he or she understands better about the earth in space. More important, to feel secure on earth, the child needs to believe that this world is held firmly in space. Therefore the child finds a better explanation in a myth that says (　4　), or (　5　). This is the type of satisfying answer that fairy tales provide to children's questions about life.

【Questions】

1. What kind of children's characteristic does the underlined sentence (1) indicate? Explain in Japanese.
2. Translate the underlined sentence (2) into Japanese.
3. Fill in blank (3) with the most appropriate word from choices a-d.
   a. confused b. confusing c. satisfied d. satisfying
4. Fill in blanks (4) and (5) with the most appropriate statement from choices a-f.
   a. the earth floats in space
   b. is held up by a giant
   c. the earth is like a ball
   d. is circling around the sun
   e. the earth rests on a turtle
   f. is spinning like a top.
5. Which of the following statements is true according to the passage? Choose three statements.
   a. Adults tend to like the answers that fairy tales provide to children's questions.
   b. Children are satisfied with the answers of intelligent and emotionally stable adults.
   c. The answers which fairy stories offer don't seem realistic to adults.
   d. Children often find realistic explanations difficult to understand.
   e. Fairy tales should be read carefully because they will provide realistic answers to children's important questions.
   f. Children feel secure when they understand why the earth floats in space through reading fairy tales.
   g. Scientifically correct answers make adults think that they have successfully explained things to children, although they actually have not.

【質問】

Q41 中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の質問形式は適切だと思いますか。

1. 適切である 2. どちらかと言えば適切である 3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である 5. 不適切である

Q42 質問 41 の回答の理由を説明してください。

Q43 中学校・高等学校の英語教員を選考する試験問題として、この問題の内容は適切だと思いますか。

1. 適切である 2. どちらかと言えば適切である 3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば不適切である 5. 不適切である

Q44 質問 43 の回答の理由を説明してください。

Q45 この問題は、中学校・高等学校の英語教員に求められるどのような能力を測定していると思いますか。

御協力ありがとうございました。